3　蓬萊雲鶴蒔絵書棚　六角紫水ほか

一基

大正六年（一九一七）　蒔絵、螺鈿
四五・五×一〇六・〇×九〇・〇

大正五年十一月三日に行われた立太子礼に際し、皇太子（昭和天皇）より大正天皇に贈られた品である。制作は同年十月に東宮職より東京美術学校に依嘱され、翌年五月に完成した。作品の構想は東京美術学校教授大村西崖、図案は吉川霊華、渡辺香涯が担当し、制作主任として漆工家六角紫水（一八六七～一九五〇）が中心となって制作に当たった。東京藝術大学の資料によれば、棚の形は正倉院宝物より《赤漆文欟木御厨子》（北倉二）および《黒柿両面厨子》（中倉一六二）を統合し、「中古ノ書棚冠棚等ノ形状ヲ加味」しているという。また、蓬萊雲鶴の図様は、やはり正倉院宝物の《黒柿蘇芳染金銀山水絵箱》（中倉一五六）から、その金銀絵の筆致を「末金鏤ノ古法」により表している。これは、従来の描金家（描金は蒔絵と同義）がこれまで全く試みていなかった手法であると記されている。なお、「末金鏤」は研出蒔絵の源流とされる技法で、紫水自身は粗い金粉を漆に混ぜて文様を描く手法と解釈していた（六角紫水『東洋漆工史』昭和七年）。本作では金銀絵に近い暈かした表現が、紫水が工夫した蒔絵技法によって表されている。また、厨子扉の内側には桜と楓樹の文様が銀平脱（漆面に銀板を貼り付ける手法）と螺鈿により表されており、正倉院宝物に比べて遙かに大きな文様を表すのに銀平脱を試みたのは、紫水が苦心した部分であるという。紫水は、明治二十六年に東京美術学校を卒業、その三年後から同三十六年までの七年間、古社寺保存計画調査嘱託として古社寺保存法による調査と修理事業に参加している。この経験と研究の成果が、存分に示された作品といえる。紫水は、明治二十六年から東京美術学校助教授の職にあったが、同三十一年に校長岡倉天心とともに辞職している。本作品の制作は、紫水が再び同校で教鞭を執る契機となった。

・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。

・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。

・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出典を明記してください。また，図版を出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

古典再生——作家たちの挑戦

三の丸尚蔵館展覧会図録No. 72

編集　宮内庁三の丸尚蔵館

制作　株式会社 東京美術

翻訳　黒川廣子

発行　宮内庁

平成二十八年三月二十六日発行

© 2016, The Museum of the Imperial Collections, Sannomaru Shozokan